

# キュウリ枝成型品種の栽培に関する研究

## (第1報) 半促成栽培における栽植密度と整枝法について

松原武彦・利光泰郎・野口敏治

(大分県農業技術センター)

MATSUBARA, T., TOSHIMITSU, Y., NOGUCHI, T.  
Studies on the Cultural Technique of Cucumber Plants  
of Lateral shoot Type Cultivars.

### (I) Effect of Planting Density and Training method of Lateral Shoot on Growth and Yield.

枝成型キュウリの良品多収技術を確立するため、半促成栽培における適正栽植密度を側枝の整枝法との関連で検討したので、その概要を報告する。

#### I. 試験方法

“王金促成”および“くるめ春”を供試し、1976年1月18日には種して、フィソフォリアに接ぎ木した。育苗はもみがらくん炭育苗による養液育苗を行い、最低夜温12~13℃で管理した。定植は2月25日に行い、ハウス内は最低夜温10~12℃、昼間は25℃を目標に管理した。栽植密度は1条植え(うね幅150cm)でa当たり150、180および240株の3区を設けた。主枝はいずれも背たけ程度で摘心したが、側枝についてはA. 第2葉で摘心する区およびB. 長側枝は第2葉で摘心し、短側枝は放任する区を栽植密度のそれぞれの区に設けた。孫づる等はすべて第1葉で摘心した。収量は7月10日まで調査した。

#### II. 結果および考察

主枝の節間は“くるめ春”が“王金促成”より長く、栽培密度が高まると“王金促成”では長くなったが、“くるめ春”では差が少なかった。側枝の発生率および総側枝数は両品種とも密植した区で少なく、この傾向は“王金促成”が著しかった。また整枝法の違いによって“王金促成”では180および240株の2葉摘心区の側枝数が多かった。側枝長は“くるめ春”が長く、第2葉までの平均長が20cmであったが、“王金促成”では10cmにすぎなかった。栽植密度による差はわずかであった。なお、“王金促成”では短側枝の発生が多く、短側枝放任区でこれをある程度まで放任したため平均長はやや長めになった。10株当たり総収量は粗植ほど増収し、品種間では“くるめ春”が多かった。側枝の整枝法をかえると“王金促成”では150株区の短側枝放任区の収量が多いのに

対し、“くるめ春”では第2葉摘心区の収量が勝った。

a 当たり換算収量は両品種とも240株/a区が最も多く、果実の品位は“王金促成”が優れたが、処理間の差はわずかであった。

以上の結果から栽培期間が比較的短い半促成栽培において、枝成型品種を用いる場合の栽植密度は、粗植することで側枝の発育を促し、株当たり収量を高めるより、やや密植して、単位面積当たりの収量を高める方が有効である。また、側枝の整枝については、粗植の場合は短側枝の取り扱いを考慮すべきと思われるが、240株/a程度であれば短めの1~2節摘心でよいと考える。

第1表 側枝の発生および収量

試験区	項目	株当たり総側枝数	平均側枝長 cm	収量(10株当たり)			a 当たり換算収量 kg
				主枝	側枝	合計	
王	150株/a A	61.5	9.3	13.2	58.5	71.7	1,077
	B	61.6	15.4	12.9	63.2	76.1	1,143
金	180 A	59.8	10.4	13.4	50.8	64.2	1,156
	B	52.6	14.5	12.2	51.3	63.5	1,143
促	240 A	50.4	10.0	10.2	42.4	52.6	1,267
	B	46.4	15.6	11.9	39.3	51.2	1,229
く	150 A	65.4	17.3	13.4	67.5	80.9	1,215
	B	68.7	20.4	12.5	62.8	75.3	1,130
る	180 A	66.6	20.4	11.4	54.4	65.8	1,183
	B	63.3	21.4	12.6	51.8	64.4	1,158
め	240 A	59.3	19.3	10.3	44.3	54.6	1,309
	B	59.3	20.6	12.1	42.5	54.6	1,310

注) 試験区(整枝)

A. 側枝第2葉摘心

B. 長側枝第2葉摘心, 短側枝放任